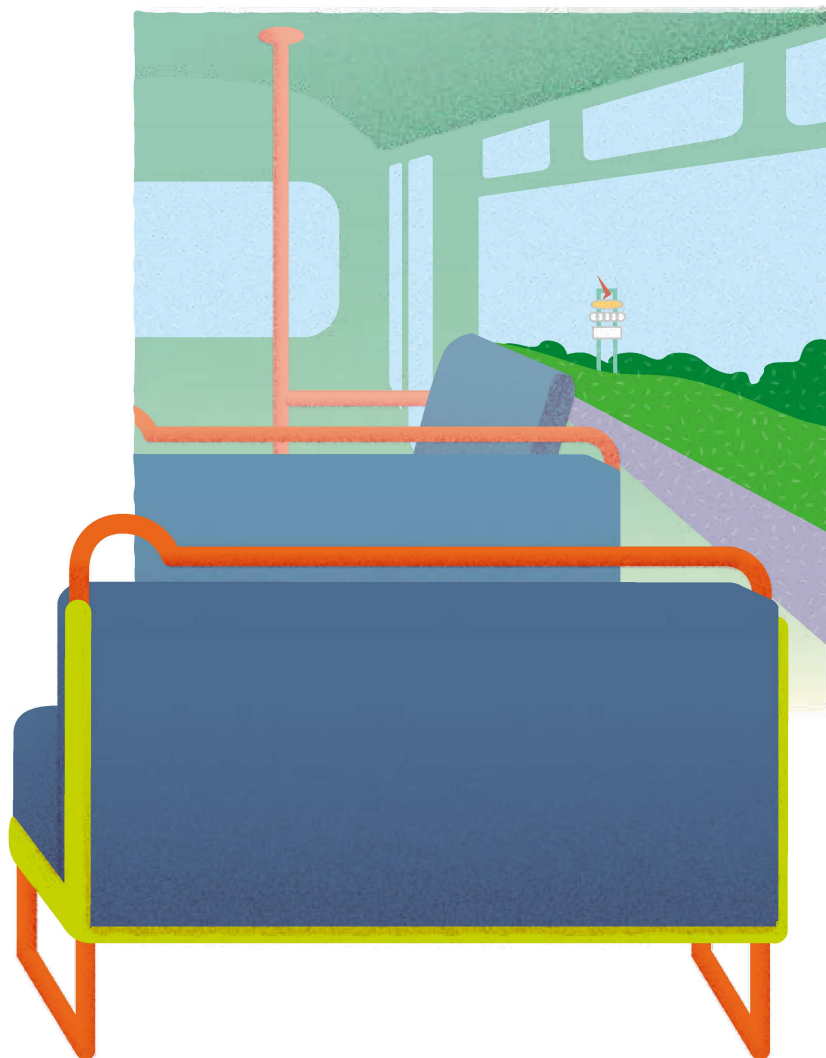


あいあう

32

2021 MAY



タイトル：この社会はあなたの場所でもあるし、私の場所でもある

特集

女性室スタッフ学習会 女性と子どもへの暴力を考える～「家族」とは何か～ 2

「女性住職の集い」を振り返って—これからの人たちへエールをこめて— 6

報告

女性室座談会 ～わきまえない私たち、わきまえちゃう私たち～ 9

Books & DVD

観てみて、読んでみて 10

報告

男女両性で形づくる教団をめざす協議会 11

つぶやき

ここ3年とちょっとのこと 関崎勝彦 12

ゆらぎ

変わらない？ 性役割 奥村和子 13

つぶやき

カマラ・ハリス氏の言葉から 六平光悦 14

ゆらぎ

男は強くてカッコいいけど、女は弱くてダサいんだよね?! 房常 晶 15

女性と子どもへの 暴力を考える

「家族」とは何か

新型コロナウイルス感染拡大において、家庭内での女性へのDV（ドメスティックバイオレンス）、子どもに対する虐待が激増する「シャドー・パンデミック（影の大流行）」が起きているといわれています。その背景には、現代社会においてこれまで放置されつづけた「家族」の中での女性や子どもの人権問題があります。そこで、児童虐待や家族問題に関する書籍の執筆もされている、ルポライターの杉山春さんをお招きして、女性室スタッフの学習会を行いました。その課題を本誌において共有したいと思います。

時代背景

日本では1970年代に、男性が働いて女性が子育てをする「近代家族」ができ、家族単位で社会保障をする仕組みが作られていきます。バブルがはじけてから、社会保障が弱体化する中で、経済状態が悪化して「近代家族」を維持できない家庭が増え、女性がパ

ート収入を得て足りない分を補うようになりました。やがて、離婚が急増したりして家族が多様化し、2000年代に入ってくると離婚後子どもを抱えて住まいを転々とする女性が増えました。リーマンショックにより、更に女性たちが困窮してきました。私が取材をした風俗店店長によると、2000年代前半では女性たちが面接に一人来たが、リーマンショック後は子どもを連れて大きな荷物を持

杉山 春さん

1958年東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。

雑誌記者を経て現在はフリーのルポライター。

児童虐待、ネグレクト、ひきこもり、自死など、家族や親子関係に関わるテーマを中心に取材に取り組む。2004年に出版された『ネグレクト育児放棄—真奈ちゃんは何で死んだか』（小学館）で第11回小学館ノンフィクション大賞受賞。その他の著作に『満洲女塾』『移民環流—南米から帰ってくる日系人たち』（共に新潮社）、『ルポ虐待 大阪二児置き去り死事件』『家族幻想「ひきこもり」から問う』（共にちくま新書）、『自死は、向き合える』（岩波ブックレット）、『児童虐待から考える 社会は家族に何を強いてきたか』（朝日新書）などがある。

って面接に来る親たちが増えたそうです。つまり、その日泊まる場所もない母子が、子どもを預ける関係も持てず、孤立した状態で働くようになったのです。

私が出会った児童虐待死事件の大きな問題点

大阪の二児置き去り事件をおこした母親は、ネグレクトや両親の離婚など



大変困難な中で適切にケアもされず育ったのですが、一時期頑張って子育てをしており、公的機関の支援も受けていました。ところが、結婚生活が破綻すると、「駄目な自分」は「公的な機関から支援を受け入れられる価値がある」とは思えず、子連れで住まいを転々としていました。

こういう児童虐待死事件を起こしているのは鬼のような親だと報道されますが、実際は孤立した状況で育ち、十分なケアを受けられなかった人たちで

す。他者を信頼すれば助けを得られるという経験もなく、自尊心が低くなると、人を頼れなくなるということでしょう。支援が必要な時にSOSを社会に出すためには、「自分には助けてもらえる価値がある」と思える力が必要です。人と自分を信頼するということはとても重要で、そういう力が乏しい人たちが大きな事件を起こし、子どもを亡くしていきます。

児童虐待とDVの関わり

2018年頃から起きた事件では、DVと児童虐待の関連性が着目されるようになりました。東京都目黒区で5歳の女の子が「パパママごめんさい」という謝罪文を書き残して亡くなった事件がありました。そして翌年の一月に、千葉県野田市で一〇歳の女の子が学校の「いじめ」のアンケートに「お父さんに暴力を受けています。どうにかありませんか？」と書いたにも関わらず、父親の激しい暴力を受け続けて亡くなった事件がありました。どちら

の父親も、人当りも悪くないが、就労は不安定でした。二つの事件は仕事で社会的なアイデンティティを持ってない

男性たちが、過剰に家族を大切にしようとして家族をコントロールしています。アイデンティティが家族形成に向けられているといえます。

他者を支配・コントロールすること

DVは殴る、蹴るといった身体暴力のイメージが強いのですが、DVの本質は支配とコントロールです。目黒区の母親は激しい暴力ではなく、「子育てができていない」と長時間の説教を受け、夫から非常に貶められていました。この夫は、「太った女は醜い」という偏った価値観を家族に押し付けていきます。後に妻は、「夫に言われた通りにしようと頑張った」と言っています。家族の価値観を加害者がコントロールするのがDVです。

目黒の事件では、夫婦が以前住んでいた四国で警察が介入したり、児童相談所が関わったりしていましたが、DVが見落とされたことにより、適切な対応とはなりませんでした。その後、家族は東京に転居し、一層孤立します。夫の支配と強いコントロール下での子育て中、激しい暴力事件が起きます。壮絶な暴力を受ける娘の姿を見た母親

はPTSDを発症し、それ以降記憶が飛んでしまいました。母親は逮捕後、拘留所で弁護士が手配した心理教育を受けたことで、自分がDV被害者であることを理解し、自分自身の体験と向き合い、記憶を取り戻していききました。非常に強い暴力を受けるとPTSDを発症することが分かってきたのが1970年代で、日本では阪神淡路大震災後に広く知られるようになりました。

目黒の事件も野田の事件もとてもよく似ていますが、野田の事件の裁判で心理学者の方が、「父親は子どもが思い通りにならない時に、恐怖に駆られていた」とおっしゃっています。だから、徹底的に娘をコントロールしないと気が済まなくなります。しかし、暴力での支配では決して安心を得られないのでエスカレートするのです。時代の中で社会に適切な居場所ができない人たちが、自分の立場を強めるために、弱い立場の子どもや妻をコントロールしてしまうことがあるのです。

子育てと社会保障

一般的に子育ては家族がするべきものと考えられがちですが、経済的社会的

状況が悪化する中で、子育てのためにお金と時間を十分にかけられない人たちがいます。例えば、シングルマザーの半分が貧困だと言われますが、それは女性が非正規就労に陥りやすい社会状況があるからです。また、男性の非正規就労者の婚姻率が下がるのは、安心して子どもを産み育てることができないだけの経済的資源が乏しいからです。家族が多様化し、家族だけで子育てがしにくい層が生まれているにもかかわらず、子育てに対する親の責任が強調されているのが今の時代です。一方で、社会保障が行き届かないために家族が困窮していくと、子どもに対する強い暴力につながります。私には、力を奪われている男性たちが「責任を負うのは自分だ」と行動することで、激しい暴力が起きてるように見えるのです。

変化していく社会の中で

これまで見てきたなどの虐待事件も、十代の女性たちが妊娠・出産をした末に子どもを亡くしてしまうという事件です。

私は目黒区の事件の母親が、「刑務

3つの虐待事件との出会い

- 愛知県豊田市長3歳児死亡事件（2000年）
『ネグレクト 真奈ちゃんはなぜ死んだか』（2007年 小学館文庫）
- 大阪市西区の事件（2010年）
『ルポ虐待 大阪2児置き去り死事件』（2013年 ちくま新書）
- 厚木事件（2007年に死亡 2014年に発覚）
『児童虐待から考える 社会は家族に何を強いてきたか』（2017年 朝日新書）

どの事件も親がモンスターのように報道された。

所を出たら自分は心理学ではなく、政治経済を勉強したい、社会のことを学びたい」と言ったことに心を動かされました。女性たちが自分の意思で夫や社会に「ノー」と言えないことが、子どもたちへの暴力にもつながっています。いくつかの虐待事件の取材を通じてその事実を見てきたので、この母親だけでなく、弱いままに置かれている若い女性や母親たちに、本当に力をつけて欲しいと思います。



そして、女性が離婚しても、あるいは一人で子どもを産んでも、安心して育てて生きていける社会の仕組みづくりが重要です。子育てには時間とお金が必要です。保育所に入りやすくしたり、児童扶養手当などの経済的支援の充実はもちろんのこと、女性たちが社会的に力を発揮しやすい環境を整えることで、社会的地位を上げ、エンパワーメント（能力開花）していくことが重要な課題です。

支援者こそ、 自分自身の五感を信じて

暴力や支配を受けていると、自身の感情がわからなくなってしまうことがあります。自身の感覚を閉ざすことで、人に従っているという部分があるのです。私は、支援者には五感を大切にしたいと思っています。五感を閉ざしたまま支援をすると、その人が本当は何に困っているのかが見えなくなるからです。ルールに従って言葉がけはできるかもしれないけれど、何が起きているのかが見えにくくなります。

次に、自分の五感を信じて行動できるかどうかを裏付けるのは知識です。

虐待やDVが起きる仕組みを知っていると、現象を観察するポイントがわかります。このおかしな行動の背景には何かがあるかを読み解きやすくなり、行動を起こせます。けれども、一人だけが知識をもって五感を研ぎ澄ましていても、今度はその人が孤立してしまうので、支援者たちは知識を共有できる仲間をもち、学び合うことが必要です。それから、誰にも言えることですが、「自分の不安を語れる」ことがとても大切です。それは自分を見つめ、そのことを他者に語ることができ、対話ができるということです。感染症の拡大で不安を語る親がとて多いですが、その気持ちを伝え合い、支え合い、分かち合うことで、孤立を防げるのではないのでしょうか。

最後になりますが、親であれば子どもに「こうしたしなければならぬ」とか「社会に適応しなさい」ということではなくて、「あなたは今、何を感じているのか」という対話がとても大事だと感じます。その根本にあるのは、私たちはこの社会で共に生きていくということです。この社会はあなたの場所でもあるし、私の場所でもあるということです。基盤にあるのだと思います。

杉山さんは、DVの本質は支配とコントロールであると指摘されました。家庭内暴力は男女双方が加害者になり得ますが、男性から女性への加害の背景には、「男性は家庭の責任を負うべきである」というジェンダー（文化的に形づくられた性差）と、女性が経済的に自立しにくい社会構造があります。そして、そのはざま子どもたちが虐待の被害に遭うということです。

この構造を乗り越えるための一歩が、男性たちに課せられる「男らしさ」を問い、女性が自立できる社会の仕組み作りであることを学びました。

感染症の拡大で、宗門のみならず社会全体が疲弊しています。その水面下で何が起きているか、丁寧に見据えながらジェンダー平等を願いつつ、これからあるべき社会を目指していきたいと思っています。（女性室より）

「女性住職の集い」を 振り返って

zoom開催

——これからの人たちへエールをこめて——

2010年に初めて「女性住職の集い」が開催されてから10年目を迎え、これまでにご参加いただいた方3人にお話を聞きました。1991年の女性住職実現から30年近くを経て、第1回目当時の118名から、現在は190名（2020年10月）と、この10年で少しずつ数は増えてきています。しかし、全体では2.6%（2020年）にすぎず、各地域の現場で各々頑張るしかない状況が続いています。これまで「集い」と題して開催してきたのは、同じ立場でありながらもそれぞれ違う境遇での悩みを聞き合うことで「自分だけではないんだ」と実感し、安心できる場として大切にしてきたからです。この集いが掲げ続けるテーマ「点から線への出会いを！」をこれからの人たちへつなげ広げていきたいという熱い思いを込めて、今回初めてオンライン鼎談という形で語り合われました。

司会——「女性住職の集い」に参加してきて、ご自分にとってどういう意味があったと思われますか。

私にとつての集い——
安心できる居場所

佐々木 子どもが成長し、家から出られるようになり参加しました。同じ立場の人がたくさんいて、安心できる居場所です。他の方とお話する機会がない私には、いろんな意見が聞けて刺激を受け、日頃の気持ちを整理でき、お互い励まし合える、大切なつながりもてる意義深い会です。

平田 第1回から参加しています。私の住む秋田県は男尊女卑が厳しく、会議で発言すると「ものを言っていない」と注意されるような地域で、女性住職の会があると知り、喜び参加しました。話し合いの中では、大なり小なりどの地域でも性差別があることに領きました。

日本は男尊女卑の傾向が強く、先進国の中でもジェンダーギャップ指数がかなり低い（※156カ国中120位、2021年3月31日発表）男性優位の国です。それでも、男女平等で回していく方向に世の中は変わってきていま



佐々木ひとみさん
三条教区第23組
福明寺住職



平田玲子さん
奥羽教区秋田県中央組
浄圓寺住職

す。ただ、お寺の世界は古い慣習が多く残っているので、伝統は守りつつ、変えていくべきことは変えていく必要があるでしょう。お寺の若い人たちが性別にかかわらず、元気に楽しくできれば「お寺は敷居が高い所」という印象が変わり、人が集まるのではないでしょう。か。広く門戸を開くことも、これらの課題のひとつだと考えています。

※世界経済フォーラムが毎年発表している、経済・教育・保健・政治分野の男女平等度を表す指数

長嶋 第1回からほぼ全回参加し、全国に頑張っている方がおられると思うと非常に心強く、私のエネルギーとなっています。数が増えれば女性の意見は通りやすくなるので、女性の住職が増えていくことは非常に大きなことです。

司会——「集い」の中では性別のことが必ず話題に上がりますが、そのことに関してはどのようにお考えでしょうか。

長嶋 はっきりものを言ったり声を上げると攻撃や排除、嫌がらせなどを受けます。異質なもののへの不寛容さ、意見が言えなくなる空気ができていると思います。

今は世界で、差別やハラスメントにスポットがあてられるようになりました。その反面、自身の日常生活ではそうではないかと思っても、笑ってごまかしたり、黙ってしまうことがあります。黙ることはそれを認めてしまうことになる。相手との関係がよほど構築されていないと言いつらく、関係が崩れることを恐れ相手に言えない。逆に、批判されることも怖くて声を出しにくい現実がある。その時その場で相手に伝えることが課題です。

差別問題研修では、往々にして差別者を糾弾する方向になっていくことがあります。でも、相手を責めるより自分が何に困っているかを伝えることや、差別者も被差別者ともに救われていく道を考えていくのが大事です。「御同朋御同行」としてお念仏で繋がれた平等な関係を生きたために、教えを丁寧に聞いていきたいですね。

司会——男性優位の通念が女性の自立を阻んでいるようにも思いますが、その点はいかがでしょう。

佐々木・平田 経済的なこともあるでしょうが、自分で何も決められず「主人に相談」という逃げが女性の自立を阻んでいるのではないのでしょうか。

長嶋 女性にも、「女性は男性に守られるものだ」という依存的な意識があるように思います。「主人」「旦那」と呼ぶのは、対等な関係ではありません。「夫」と「妻」がいい。

女性に学ぶ機会と男女平等の教育があれば、能力的性差という差別は超えられる

司会——公おおやのことは大体男性の役目で、女性に役職などの機会が与えられないという環境が長く続いています。「女性は勉強もスポーツもできなくていい」という目線がある中、お寺の中でも女の子には何も教えずにいいという扱いをうけてきた女性が多いのではないのでしょうか。

長嶋 「女性は社会進出しなくていい」という長年の社会通念の刷り込みから、女性に対する排除と制限が今も続いていることで、女性が不利益を被ってしまう仕組みがなかなか変わらない。

平田 小さい時から積極的に、女の子に教育を受けさせることが必要ですね。それが、これからの女性の意欲向上と意識の解放につながっていくはず



司会：中川和子
女性室スタッフ



長嶋明子さん
京都教区近江第6組
願證寺住職

です。

宗門内のことで言えば、未だ各寺院の「寺院規則」に男性が住職になるという一項目がそのまま残り続けていることが多いから、娘が継ぐことが第一の選択にならないのでしょうか。それは今も「男の子を産むまでがんばりなさい」という、家督を男子が継ぐという「家制度」の考え方が私たちの家族観として根付いていることも一つの要因です。

※本山では住職修習の際に「寺院規則」の変更を指導しています。

司会——様々なところに女性や少数者がいないことが前提の施設や設備にも差別構造を感じます。ところで、組長さんなどの役職についてはどうですか？

長嶋 組長、副組長は性差に関わらず役があたります。私も今、副組長をしています。何回かすることで慣れるということがあります。組長、副組長、会計などをすると、仕事の内容がよく分かるようになります。一年間の事業を把握でき、事前に計画をしていくことが分かるようになり、自分にとって勉強になります。

佐々木 「女の人でも組長になる」と

言われて受けました。私は、「わからないので教えてください」と、経験豊富である男性住職の方々に率直に伝えて助けを求めました。聞きたいことや教えてほしいことがあっても、周りに同じ立場の女性経験者はいません。そこで、男女関係なく仕事を教えてもらうことで、自然な形で女性が参画し、新しい視点や方向性を示していく道筋ができたように思います。性別を超えた連帯が大事だと感じています。

司会——しやうめい声明に関してはいかがですか。

長嶋 男性と女性の音域が違うことは、ほとんど認識されていないと感じます。女性の方が実は音域は低く、女性になるべく高い声を出すことを心掛け、男性はなるべく女性に合わせて低い声を出すように私は習いました。そこを少し意識していくだけで、きれいな声明ができると思います。

司会——**これからの人へのメッセージをお聞かせ下さい。**

佐々木 これからの人に苦労話を聞かせたくない気持ちもありますが、女性が住職になる背景には近親者や配偶者の死、病气、離婚などがあることが多

いように思います。私も毎日毎日が精一杯で、未来のことを考えられなかった。でも、一日一日をやり過ごし、時が経てば小さい子どもは成長し、自分も身体が忙しさに慣れてきます。だから、今苦しんでいる方々がいたら、一日一日を何とか過ごしてくださいと伝えたいです。未来は「何とかなる！」。

平田 お互い固定観念に捉われず、「お好きなようになさい」と言いたいです。これからは女性が前に出て、住職になる方もたくさんいていい。ただ、お寺を一人でまわすのは大変で、性別にかかわらず家事を分業し、サポートする人が必要です。また、ともにお寺を守る坊守の在り方や位置付けについても一緒に考え、住職と歩む平等な関係性を常に確かめ合っていくことが望まれます。

司会——**今日はどうもありがとうございました。**



わきまえない私たち、 わきまえちゃう私たち

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の森喜朗会長(当時)が女性を蔑視した発言で辞任した件で、女性室ではスタッフの座談会を開き、主な問題点への意見交換をしました。内容の一部を紹介します。

? 組織の中の 女性の割合って??

◆ 社会生活では男女比が概ね1:1なのに、組織を構成する時に女性4割をお願いしていることが悲しい。宗門でも議決機関や教化委員会の場では、未だ女性3割にも満たせていない現状がある。

◆ まずは男女比を同じにすることが、組織の中で男女平等参画のスタートラインに立ったと言える。

◆ 積極的格差是正措置(ポジティブアクション)に対する拒否、抵抗感がうつすらと社会の中で染み渡っているが、そこには「力不足の女性」が「不当に地位を得ることになる」という偏見がないだろうか? 一方、やり方によっては「ただの数合わせに過ぎないのでは?」と感じてしまうこともある。

◆ 女性が現場に出て発言できる環境を整えることも必要である。

? 女性が多い会議は 時間がかかる?

◆ 男性が多い会議でも時間はかかる。女性はよくしゃべると思われているのか、「女はこうである」という価値観が定着している。日本が世界各国の中でジェンダーギャップ指数120位に位置するところの表れでもある。

◆ 旧来の男性のみの会議では、慣れた人同士で議論が進み、新しく女性が入っても何を議論しているのか分からないまま進んでしまう。時間をかけてでも共有するという努力が必要。

? 女性にはわきまえないといけなの?

◆ 多数の男性に対して、女性にはわきまえて発言しないと聞いてもらえないのか。できなければ黙するしかなく、忍耐を身につけざるを得ない。

◆ 「わきまえる女」という言葉には、男性が自分たちに都合の良い人を選び、自分たちが社会を作っているのだという意識が表れている。

◆ 男性に対しても上下関係などにより「わきまえない」という同調圧力がある。

? 女性蔑視に「あれ?」と 思ったら、どうする??

◆ 問題発言が出た時、その場ですぐに

反応するのは難しい。言わなければと黙っている内に終わってしまう。特に、年長者・利害関係者だと遠慮してしまう。

◆ 女性を蔑視する発言に違和感をおぼえない女性もいる。また、言ってもわかってもらえないと決めつけてしまっていることもあるが、声をあげないと容認したことになる。

◆ 今回の報道によつて、今まで問題にすらされなかったことが、問題として押さえられるようになってきたとも言える。粘り強く言い続け、伝えようと努力することも大事。

多くの組織が男性中心に運営され、女性たちはわきまえざるを得ない立場を強いられています。宗門も例外ではありません。今回の発言が意味する問題性を私たち宗門組織の課題として、平等に参画できる同朋社会の実現を目指していきたいと考えます。

『存在しない女たち 男性優位の世界にひそみ 見せかけのファクトを暴く』

キャロライン・クリアド＝ペレス著
神崎朗子訳 河出書房新社
定価：2,970円（税込）



題名は、この世に女性がまるで存在しないかのように扱われている現実を表している。実際はそんなことはない、と思われるだろうか。家の中でも外でも女性が強く、毎日遠慮している男性もいるかもしれない。「最近の女は、すぐにセクハラだの男女差別だのと口をとがらせている」「男だって大変なのに、いつまで男を責め立てれば気が済むのか」と。

だが、自動車設計やスマートフォン開発、医療技術や室温管理など様々なことが、男性を基準にしている。男女の体格差を考慮されていない事実を、男性が気付きにくいのは当然ではある。しかし、現実生命をも脅かしている事実がある。世界の人口の半分以上を占める女性の存在を無視することなく、まずは声を聞いてほしい。

また、目に見えるものだけでなく、私たちの無意識的な偏見をも掘り起こす一冊。

『ビリーブ 未来への大逆転』

発売・販売元：ギャガ 2020年7月3日発売
ブルーレイ：2,200円（税込）
DVD：1,257円（税込）
© 2018 STORYTELLER DISTRIBUTION CO., LLC.



舞台は1950年代のアメリカ。弁護士をめざす主人公はハーバード法科大学院入学時、「ハーバードマンの席を奪って女性が入学した理由」を問われる。女性は仕事を選ばず、クレジットカードすら持てない「男社会」の中、大学に女子トイレはなく、発言すら困難を極めた。家事育児を分担する夫の協力のもと主席で卒業するも、「女性」を理由に法律事務所から門前払いされる。私たちの日常に今もある話ではないかと、考えさせられる。

今から50年前、「男女平等」を訴える契機として専業主夫の母親介護を認める裁判に、弁護士として挑む主人公。「国は変わる」と信じ、「100年前なら私はこの法廷に立つことができなかった」と、社会の変化に応じた法改正を求め続けた姿に、「私も」と続きたい気持ちにさせられる。

2020年、アメリカ現役最高裁判事ルース・ギンズバーグ没後、ドキュメンタリー版『RBG 最強の85歳』と共に話題となり、各地で追悼上映されたドラマ版。

観てみて、 読んでみて

『これからの男の子たちへ —「男らしさ」から自由に なるためのレッスン—』

太田啓子著 大月書店
定価：1,760円（税込）



弁護士として関わってきたDV離婚やハラスメント事案での男性の言動や、中高年になっても変わらない性差別意識を見るにつけ、説得や教育での労力と時間を考えると、社会から性差別をなくすためには、男の子の育て方こそが大切であると思い、執筆されたようだ。

ボーヴォワールの「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という有名な言葉があるが、息子たちの成長を見ていると、男の子もまた「男に生まれたというよりも“男になる”のだな」という気がしてくると、著者は語っている。

具体的な事例も多く、これからの男の子たちにはもちろん読んでほしいのだが、子育て中のパパやママ、おじいちゃんやおばあちゃんにもお薦めしたい、「ジェンダー平等時代の子育て論」。

『ほしいのは「つかれない家族」 ワンオペ家事&育児に絶望した 私が見つけた家族のシアワセ』

ハラユキ著 講談社
定価：1,560円（税込）



フリーランスのイラストレーターである作者は、海外出張もある長時間労働の夫との育児に疲れ果て、「夫も自分も疲れない仕組み」作りへ乗り出す。些細なことだが、アドバイスが欲しい時と、ただ愚痴を聞いて欲しいだけの時の話し始めを工夫し、家事・育児の話をしやすくすることで、夫の家事・育児参加が増えていく。夫の転勤でスペインに移り住んだのを機に、多種多様な家庭の話を積極的に聞き、取材をして回って見えてきた、世界共通の「つかれない家族」の暮らし方と考え方を紹介している。

登場する夫婦は同性婚で育児をしていたり、国際結婚ファミリーであったり多様であるが、わかりやすい漫画で、きれいごとで済まないレベルまで具体的に日常を描写しており、随所に「つかれない家族」へのヒントが詰まっている。大なり小なり問題山積みの我が家の悩みに、パートナーと一緒に読みたい一冊。

男女両性で形づくる 教団をめざす協議会

2020年10月7日、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、Zoomを使用したウェブ会議形式で「男女両性で形づくる教団をめざす協議会」が開催されました。2016年度からは全教区を2ヶ年にわけて開催しており、今年度は東北連区7教区（北海道・奥羽・山形・仙台・東京・三条・高田）、東海連区5教区（岐阜・高山・大垣・岡崎・名古屋・三重）、昨年度の欠席教区（金沢）を対象とし、各々の教区での取り組みや課題について協議しました。

趣旨説明

「女性室の歩みと願い」を動画を共有しながら説明。女性室が2019年に発行した『女性史に学ぶ学習資料集』や『身同』第39号「聖教と私―差別問題から問われること」を紹介。性差別問題を具体的な信心の課題として共有していくための活動であることの確認。

教区活動報告―三重教区

三重教区社会教化小委員会が企画し、桑名別院報恩講（2019年12月20日～23日）にあわせて開催された「ヤラリー展」いろいろな性を生きる展」

班別座談

Zoomのブレイクアウト機能を使い実施。

この協議会を開催するにあたり、各教区の性差別に関する取り組みについて、2019年度の実施報告と2020年度の計画がまとめられた「協議資料」をもとに、班ごとに各教区の活動報告と課題を共有した。

全体協議会

班別協議の報告と出された意見

- 「男女両性で形づくる教団をめざす」ための具体的な目標を明確に立て、それに向かって方策を立てていくことが必要。
- 教区の役職者研修などで課題を共有することが大切である。
- 性の多様性を考慮し、「男女平等参画」を補完するような新しい表現は考えられないものだろうか。
- 性差別に関する問題を継続して取り組むことの困難さを改めて感じ、意識啓発の更なる取り組みを粘り強く進めていきたい。





ここ3年と ちょっとのこと



2017年の2月に得度した。飲んだくれていた僕に、友達とその義父の住職が手を差し伸べてくれたのだった。「お前の道を見つけてこい」と言って、専修学院にも行かせてもらった。卒業前にはお見合いをした。「二人において「共に」ということが本当に成り立つのはどこなんでしょうか」（『愛について』（非売品））という児玉先生の言葉が頭の中を巡っていた。「結婚しましょう」と言ったのが、妻との3回目のデートからの帰り道だった。「“結婚”そのものが地獄かもしれないですね」と専修学院の先輩は言っていた。

2018年の6月に新潟に引っ越して8月に結婚し、姓が変わった。義理の祖父母と両親と僕たち夫婦の3世帯で同居がはじまり、「家族」や「寺」って何なんだろうということばかりを考える日々が続いている。鬱病や不安障害にもなったが、新しい家族の中ではお互いに戸惑うことがあったり、行き違いもたくさんあったんじゃないだろうか。いろんなサポートや気遣いをしてもらっているし、僕自身が「地獄」を作り出しているということもあった。寺で生きてきた人たちにも「寺」や「家族」の中で、辛いことがたくさんあったのだろう。信田さよ子氏は「家族において生じる問題は、原因があるわけではない（略）悪循環が起こっているのだ」（『後悔しない子育て 世代間連鎖を防ぐために必要なこと』）と述べている。原因だとされた傷つきや孤立感がかえって他者に向かい、さらなる支配や締め付けにつながることもあるようだ。

外部からの視線が閉ざされがちな家の中では、「私が正しい」という力の横暴と支配がはびこっていく危険があり、それを防ぐために虐待やDVという言葉は生まれたという。寺ではどうなんだろうか。僕は、妻をコントロールしようとして精神的な暴力で傷つけることがあった。

自身の過去を振り返ってみると、家庭や学校、クラブ活動等での暴力の怖さや痛みが印象に残っている。「暴力と支配」の悪循環、専修学院の先輩の言葉を借りるなら「暴力の流転を超える」とはどういうことなのか。「自身が自己のもつ真の希求と自身の実際の行動とのへだたりを見据えることが重要である」（『DV 加害者プログラム・マニュアル』）と高野嘉之氏は言う。

自身の「願い」に立ち帰りながらの試行錯誤の毎日で、妻は手を握ってくれている。1月には妻と家を離れ、2月には子どもが生まれてきてくれた。今はとにかく3人で安心できる場所を共に築いていきたい。家族との関係には未だに不安ばかりあるし、僕の歩みは「道半ば」だ。

変わらない？ 性役割

「おかあさん、来週から学校が休校になるので、子ども預かれない？」突然の娘からの電話だった。昨年2月27日、前首相が新型コロナウイルス感染症対策として、全国の小中高校を臨時休校にすると発表し、新学期まで予想外の休校となった。卒業間近の孫も小学校6年間の学びが急に終わり、続きは家庭学習に任された。小学校4年生の孫は、利用している市の子ども放課後事業や学童もどうなるか見当がつかないし、親は急に子どもだけ家において仕事に行けない。娘のようにケアワークで在宅勤務ができない職種は女性が多い。そして留守中の子どもの食事等に四苦八苦したが、多くの男性の場合、家庭内での日常は変らなかったのではないかな。育児・子育ては女の仕事という“神話”に基づくジェンダー不平等の問題が露呈した。

専業主婦の人、パートタイマーでもともと短時間勤務の人、近親者がいるなど緊急でも対応できた人たちを除けば、苦戦したのは女性たちだった。春休み後も入学式や始業式だけ登校し休校は5月下旬まで続いた。これらの決定をしたのはある特定の人たちだったから、このような場合に的確な発想が生まれてこないのだ。

また、スーパーが「密」になったとき、大阪の市長が「買い物に女は時間をかけすぎ。男は言われた物だけをさっと買うから早い」と発言し、はからずも“家事の主体は女性”という常態化した性役割を認めることとなってしまった。

ちょうどこの時期、私の住む名古屋市で「第9回男女平等参画基礎調査」結果が報告され、「夫は外で働き妻は家庭」に反対する人が、調査以来初めて半数を超えた。市は「男女共同参加社会の実現に向けて、市民の意識も一歩ずつ近づいていると感じる」と、コメントした。初調査は、私が子育て真最中の頃だった。40年近く経ち、やっと性役割の認識が変わりつつある。厚生労働省が「男性版産休」の新設を示したが、「妻の退院と実家から自宅に戻るときに、夫が2週間ずつ休みを取ることが想定される」という理由も含まれている。そもそも実家での出産割合がどれほどかわからないが、あてにされるのは祖父でなく祖母だろう。何歳になっても“女の役割”が求められる。

姿のない声が、“女らしく”生きることを求めている。それに異を唱えようとするとき、私は「それは差別です」と言わず、“女のわがまま”として折り合いをつけ、自分にも周りにも認めさせていることが多い。しかし、それでは性役割は固定化されたままである。気づかされたことにしっかりこだわり続けていくことが、さまざまな差別をなくす糸口だと思う。

名古屋教区 おくむらかずこ
奥村和子





カマラ・ハリス氏の 言葉から



2021年1月20日（日本時間21日）に、アメリカ大統領ジョー・バイデン氏と副大統領カマラ・ハリス氏の就任式が行われました。前年11月に行われた大統領選挙の勝利宣言で、カマラ・ハリス氏が副大統領就任の意義を語った演説がとても印象的でした。

それは「私が最初の女性の副大統領になるかもしれませんが、最後ではありません」という一節です。アメリカ合衆国では100年ほど前に憲法修正第19条で性別による選挙権の制限が撤廃されていましたが、実際に女性で副大統領に就任するのは、カマラ・ハリス氏が初めてでした。制度に性差別があるのは問題ですが、法が改められ制度上の制限がなくなっても、実際の就任には長い時間が必要だったのです。現在でも、制度上は平等でも、職業や役職によっては一つの性別だけに偏っているものもたくさんあります。本来ならばどんな職業や役職も、性的マイノリティも含めて性別に関係ないはずです。それを妨げているものが私たちの意識の中にあるのだとすれば、乗り越えていかなければいけないと思います。アメリカ大統領や日本の内閣総理大臣には、まだ女性が就任したことはありませんが、近い将来に実現することを願っています。「最後ではありません」というカマラ・ハリス氏の言葉に、未来への願いを感じています。

身近なところから考えると、真宗大谷派では1991年まで女性の住職継承が認められませんでした。1991年の寺院教会条例改正で「男子の教師」がないときという制限があるものの「女子の教師」にも継承が認められ、さらに1996年には性別による制限がなくなりました。

しかし1996年以降も、私が所属する寺では住職の継承に寺院規則によって「男子たる教師」という資格条件が残っていましたが、住職交代をきっかけとして2018年に規則を改正し、性別による継承制限をなくすことができました。

私には一人の娘がいます。彼女が将来、どのような職業を希望するのかは分かりません。もし彼女が自ら住職になりたいと思ったときには、しっかり受け入れられる平等な意識の土壌を培っていきたいと思っています。

親鸞聖人の末娘である覚信尼公が、他の門弟と協力して本願寺の基礎となる大谷廟堂を建立し、留守職^{るすしき}についたと聞いています。そのことが一つの励ましになっています。

男は強くてカッコいいけど、 女は弱くてダサいんだよね?!

最近、6歳の息子が性差別的価値観を次々と仕入れてくるようになった。そのおかげで「機
の到来！キター！」と、今や私がワクワクさせられるようになってきたので、いくつか紹介したい。

ある日は「ねえ母！男は強くてカッコいいけど、女は弱くてダサいんだよね！」と私に言っ
てきた。「キター！」である。「じゃあ母は弱くてダサいの？」と聞くと、キョトンとして「な
んで？全然ダサくないよ？」と言うので、「じゃあ女は弱くてダサいとは決まってないじゃん」
と返すと、「本当だ！〇〇君が嘘言った！」と地団駄を踏んでいた。

ある日は「母！カンチョー！」と、人差し指を立てて気色満面で私の背部に突進してきた。「キ
ター！」である。私は医療処置の浣腸とは全く異なるその行為を性的暴力と断定しているので、
この機には「プライベートパーツ※」の説明を試みた。「それらは体の内側につながって、体
を作り、命を守り、赤ちゃんを育む大切な部分。他人のその部分をふざけて触ったり、冗談にし
て笑ってはいけない。あなたがみんなを大切にできたら、みんなもあなたを大切にしてくれるよ」
と諭すと、私の目を真っ直ぐに見つめて大きく頷いた。

また別の日には、「母のことをおばあさんが来たって〇〇君が言った！」と激怒していた。「キ
ター！」である。園児らの目に、46歳で初産の母が「おばあさん」に映るのはごく自然なことだ。
だが、ここで留意すべきは「おばあさんに見える母は若いママに劣る」というジェンダーの内
面化である。「母は何歳だ？」とハグすると「52歳！」と即答するので、「母は〇〇君の26歳の
ママの何倍だ？」と問うと、「2倍？」と泣き止んで「すごく大きい！」と顔を上げた。以来、「母
は52歳だもんね」と私の年齢を随所で紹介するようになってしまったが、「若さは女性にとって
優位の価値観ではない」と示した以上、私はそれを諫められない。

そうした彼との関わりの中で、気づかされたことがある。それは、彼が性差別的価値観に全
く晒されずに成長することは不可能だが、彼が触れたものを看過しない働きかけならば私にも
できるということだ。例えばテレビを観ていても、「カンチョー！」を笑うような場面には「人
の尊厳を傷つける暴力だ」と伝えられる。某大ヒットアニメで「男なら耐えろ！」とあれば、「女
でも！」と補足できる。さあ、今日の彼はどんな「キター！」を仕入れてきてくれるだろうか。

※「プライベートパーツ」と呼ばれるのは「口・胸・性器・お尻」の4カ所。
「プライベートゾーン」「水着ゾーン」と呼ばれることもあります。
参考：『おうち性教育ははじめます』フクチマミ・村瀬幸浩著（KADOKAWA）

山陽教区 美作組 本教寺 房常 晶



『あいあう』とは…

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』（顕浄土真実教行証文類）「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」【真宗聖典一五九頁】という言葉から名づけられました。

「遭遇（あひあひ）こと難し」とか「遇（あ）いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしても出遇いのよろこびが表わされているのでしよう。

日々の生活にあつて、わたしたちが「生きる」ということを考えたとき、それは、いろいろな人と声をかけあつてこそ「生きる」ということがなりたつていくといつても過言ではありません。しかし、時にその声が届かなかつたり、行き違つたり、そのためにいろいろな出遇いをしていながら、まわりの人を見失っているのではないのでしょうか。

いま、その出会いそのものに出遇いなおすことによって、自然に向きあうことができるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。

あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出会いを積み重ねていきたいと思っています。

『あいあう』『メンズあいあう』のバックナンバーについて

バックナンバーをご入用の方はお問い合わせください。女性室HP「あいあうnet」でもご覧いただけます。

新スタッフ紹介

昨年7月より女性室にご縁をいただきました、山陽教区第一組西寶寺坊守の正親久美子です。長い間、坊守会の役員をさせていただき、開法場に身を置き、男性中心の会議に参加し、その中で見てきたことを声に出せればと思っております。どうぞよろしく願います。

宗教法人法や寺院規則では代表役員である住職に大きな権限がありますが、坊守も同朋会運動の担い手の一人であり、積極的に寺院の教化活動や運営に関わっている職分的存在であると自負しております。坊守の位置づけはどうか。坊守の声、女性の声を届けるにはどのようにすればよいのか。男女両性で形づくる教団を願つて、歩みを進めていきたいと思つております。皆様のご意見をお聞かせ下さい。

（正親久美子）

私が坊守になった頃、真宗大谷派には女性住職があらう、「女に安心が語れるのか」と言われるような時代でした。

それから40年以上たった今では、住職はもちろん、いろんな役職にも女性の姿が見られるようになりました。それどころか、教区の各委員会に女性を入れるのが通例化してきて、時代は大きく変わりました。かつては黙っているのが美德であった女性に、どうしても委員になつて意見を出してください、とお願いする場面も見られます。

この激しく移り変わる時代をどうとらえればいいのかと、複雑な気持ちを持ちながら、移り変わるはずのない人の本質を確かめ、見て聞いて、学んでいきたいと思ひます。

（渡邊智子）

女性室の動き

【スタッフ派遣】

2020年

12月22日 真宗大谷派9条の会・大垣 総会

2021年

3月19日 赤羽別院彼岸会講師

4月 6日 福井教区解放運動特別指定伝道研修

4月23日 仙台教区坊守会講師

【男女両性で形づくる教団をめざす協議会】

2020年10月7日 会場：しんらん交流館・Zoom

【『女性史に学ぶ学習資料集』刊行記念「真宗大谷派の女性近現代史展」】

2021年2月24日～3月22日 会場：しんらん交流館

【第10回女性住職の集い】

2021年3月2日 会場：しんらん交流館・Zoom

【第21回女性会議】

2021年4月13日

会場：しんらん交流館・Zoom・教務所サテライト会場

女性室からのお知らせ

2019年8月発行『女性史に学ぶ学習資料集』巻末年表に、2008年以降の真宗大谷派坊守会連盟主催の諸行事が記載されていないとの指摘をいただきました。申し訳ありませんでした。

ついては、当該行事について追加表を作成しました。今後販売する分はすでに追加表を挟み込みましたが、すでに購入された方は、女性室HP「あいあうnet」よりダウンロードして、挟み込みください。

ご希望の方へは女性室より直接郵送しますので、電話・ファックス・メール等でご連絡ください。

お手数をおかけしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

女性室広報誌

あいあう

女性室広報誌『あいあう』第32号

発行 2021年5月28日

発行人 望月慶子

発行所 真宗大谷派 解放運動推進本部女性室

〒600-8164

京都市下京区上柳町199 しんらん交流館内

TEL 075-371-9247

FAX 075-371-6171

女性室ホームページ <https://aiau-higashihonganji.net>

宗派ホームページ <http://www.higashihonganji.or.jp>

表紙絵：上田 文

スタッフ学習会で、杉山春さんは「この社会はあなたの場所でもあるし、私の場所でもある」と語られました。

「私の場所でもある」ということを黙らなかつた人のひとりとして、ローザ・パークスが思い浮かびます。ローザ・パークスは、1955年、アメリカ合衆国アラバマ州で「白人に席を譲れ」という公営バスの運転手の命令を拒み、人種分離法違反の容疑で逮捕されました。この出来事への抗議の広がり、アフリカ系アメリカ人による公民権運動へと繋がっていきました。表紙では、そのバスの席を後ろから描いています。

差別や偏見と必死で戦った数多の「わきまえ（黙ら）なかつた人たち」がいて、私たちの社会は変わってきました。その事を忘れたくないと思います。同時に、今声をあげる人たちに対して「自分は沈黙で応えてはいないか？」とずっと気になっています。